

『雨月物語』『菊花の約』解釈の諸問題

——テキストの解釈行為分析・テキスト解釈生成学を目指して——

山本 秀樹

〈前置き〉

以下の文章は、そのほとんどすべては平成二十三年十一月二十六日土曜開催の高知大学国語国文学会第六十回研究発表会において同じタイトルをにかけて行った「講演」のために用意した原稿のままである。

このたび、『高知大国文』に投稿させていただくにして手を加えたのは以下の点に關してのみで、それは

(一) 当日の配布資料プリント(B4判1枚)は、基本的には本稿の引用文を抽出してこしらえたものであったが、そちらの方には引用文献に關する情報を加えてあった。それをこちらに写した。

(二) 当日には必須であった「……番の引用文を参照せよ」の類の、資料の見べき位置を指示するためだけに存在する文言は黙読の際 unnecessary ので削除し、その際、文章のつながりがおかしくならないよ

う適宜言葉を加除し、あるいは差し換えた。以上の二点にすぎない。

文字という視覚記号に觸發された意味が瞬時に大脳皮質上に浮かび上がるこの期待できない聴覚音声記号を主たる意味伝達媒体とせざるを得ないのが口頭発表というものなので、——にもかかわらず、テキストの「解釈」の再検討などという初めから論旨が一筋縄になるわけではない演題を選んだので(いや、言うまでもなくテキストの「解釈」だとて、論旨が一筋の一本調子で終わってしまうのでは、かえって話としては信頼の置きようがないようなものだが)、耳で聞いて話を呑み込んでいたかきやすいように、話の筋道がはっきりわかるよう、論旨の明快と歯切れの好い物言いをはたすら心懸けて「講演」用原稿を執筆したのであったが、ためにここには、通常の私の書記論文には現出しないはつきりとした明快な物

言いがかり、そのはつきりとした物言いには、当然にそれ相応の魅力というものがあつて、このように視覚記号を主たる手段とする論文化を行う段になつても、とてもではないが切り捨てることのできない愛着が感じられた。

よつて、原稿外の当日のアドリブ以外は全て、高知大学の学会の雑誌たる本誌の性格に甘えて(また、福島先生の「どんな物でも好い(投稿内容を何かしらでも限定するような従うべきルールはない)」との御言葉に甘えて)当日のままに掲載していただくことにした。

まず第一に、右に述べたような実際に「語る」ことを予定することによつてはじめて可能となつた考察内容を保持するため、第二に、当日、実際に言挙げされ「語」られた内容の保存のため、(それは、まず第一には当日参加聴講できなかった高知大学国語国文学会会員のみなさんのため、なのであるが、そればかりではなく、それを文字媒体で誰の眼にも触れるようにするためにも、)内容に関わる部分ほど、この度の『高知大國文』に掲載していただくための作業では手を加えていない。この度の推敲添削は、専ら形骸に関わることがらについてのみ行つた。

よつて、この機会にふりかえつて説明を補うべきと思われたことがらに関しては補注を付した。なお、本稿の

副題は、当日の資料内の見出しとして使用してあつたものをこの度副題の位置に昇格させたもので、厳密に言えば、当日の状態とはちがう箇所^補に当たることもお含みおき下されたい。

わたくしは本日、一つの作品の解釈に関して、与えられた一時間ほどをお話しさせていただこうと思つて、こういう演題でこの場に臨んでおりますけれども、これはどうしても話をあれやこれやとこねくりまわすことになりまして、そうした点では講演とか、学会発表とか、短時間でしゃべつて聞いていただくにはあんまり向かない、——文字で書いて眼で読んでいただく方が好い性質のテーマなのだろうと思ひます。

それが証拠に、福島先生から参考にとおっしゃつて、この学会の最近年の講演題目というのを送つていただきましたけれども、それを拝見いたしましたも一作品の解釈でお話をされたとおぼしき演題を眼にすることはできません^補した。

また、近世文学会などでは今やそんな発表を耳にすることはほとんど絶無ではないでしょうか。^補おそらくは研究界にも「声の文化」と「文字の文化」があることは争えない事実であろうと思ひます。

にもかかわらず、こんな演題でお話しを申し上げようとするのは、上田秋成のように年をとって狷介孤独を募らせてきたわたくしのわがままに類することがらです。本日は、わたくしの方でも、できるかぎり話をすつきりお耳にお入れいただけるよう努力をいたしますので、曲げてお許しをねがいたいと思います。

しかしながら、年をとっておのれの性に沿わないことがしたくなくなりつつある、このごろのわたくしにとつては、結局何か一つの作品を読んで考えるというのが、小さい頃から馴染みの、おのれの性に合う、自分にとつて一番していて楽しい、たいへん落ち着く、納得のいく話題であるのです。どうかお許しを願いたく存じます。

—

さて、本日のお話しは江戸時代の読み物の中では一二を争う認知度を誇ることができるかもしれない『雨月物語』——なにしろ現在、角川ソフィア文庫とちくま学芸文庫と講談社学術文庫と、同時並行で三つもの全現代語訳付きの文庫で読める古典作品が他にあるのでしょうか？——その中の一話に関するお話しなのですが、演題が『雨月物語』『菊花の約』の諸問題」ではなく、「解釈の」となっておりますところ、実は、お話しさせていただく側にとつてはたいへんに意味がございます。

と申しますのは、「近世文学六十年」とか言われ、戦後に本格的研究が始まったと言われる研究史の短い江戸時代の文学ですが、それでもさすがに『雨月物語』くらいになりますと、所収各話につきだいたい六十本くらいは論文が書かれております。^{補三}

『雨月物語』はたかだか厚さ約1センチの文庫本一冊分、それも原文と現代語訳でその厚さです。たとえば本日取り上げます「菊花の約」の場合、その原文は角川ソフィア文庫で十五ページ。1ページの本文が1行27字かける15行の約405字で四〇〇字詰原稿用紙一枚と五文字分、「菊花の約」は約五千八百十七字でできております。四〇〇字詰原稿用紙に換算して約十四枚と半分です。そうしますと、——あまり意味のない計算になりますけれども——約九十六・九五字、つまり約百字につき1本、論文が書かれている計算になります。

何が言いたいのか？ つまり、長大な作品についてならそれなりに、そこに含まれる構成要素もきわめて多くなりまししょうし、その分、いまだ論じられていない解釈パターンが伏在する余地も増えるわけなのでしょうけれども、『雨月物語』の場合、各編が短すぎます。

われわれは実生活の、ある場面において、ある作品に対して、「解釈は無限にある」などとうっかり言う場合がありますけれども、実際には、きわめて数の限られた有限の

言葉の、極めて意味の限られた有意味の連鎖から引き出せる解釈が無限にあるはずがない。——そうではありませんか？

しかも、実際に行われる作業ときたら、「主題」などと言って、最終的には一つの意味に集約しようとしたりするわけです。土台その前提条件で無限に解釈を引き出せるはずがないのではないのでしょうか。

「解釈は無限にある」などと言う人がいたら、「論より証拠、じゃあ実際に、帽子から万国旗を引っ張り出す手品師よろしく解釈を無限に引っ張り出して見せて下さいよ」と言いたくなつてきます（おそらく実際には「解釈は無限にあり得る」という発話は、その言葉の意味通りの命題を主張する行為ではなく、「わたしはその解釈に従いたくない」あるいは「わたしにも発言権がある」という意味を含意するにすぎないのです）。

それでも、実際に「菊花の約」について書かれた約六十本の論文をすべて読んでみると、人間、よくもまあたかだか文庫本15ページの作品につき、これだけの解釈ヴァリエーションを生成できるものだと、正直、感動に近いものを禁じ得ません。

やはり他と異なる解釈を産み出さねばならないという前提条件のもと行われている作業ですから、能力の極限にまで追い込まれた頭脳が、通常ではあり得ないであろう極限

の解釈パターンまでもを産み出しているように思われます。

それにしても約六十本です。

そろそろわれわれは、テキストを構成するいかなる要素が、どのように機能して異なる解釈を生成させるのか、解釈生成の仕組みなり秘密なりを解明する作業に着手してみても好い段階にすでに到達しているもののように思われます。

本日は、その作業に着手することを試みてみたいと思います。うまく結果が出るとは限らないので「着手」であり「試み」であります。

そして、各編の長さがきわめて短い『雨月物語』は、そのテキスト構造がシンプルであることを期待できることから、そのような作業をほどこしてテキスト解釈生成の一般的仮説モデルを立ち上げるための試金石として、採用されてよい一サンプルたる資格を有する作品と言つてよいのではないかと、わたくしは考えます。

二

前置きはこれくらいにいたしまして、本題の「菊花の約」の解釈に話を移したいと思います。

念のために「菊花の約」のストーリーの簡単な確認から始めさせていただきます。

（あらすじ）

世は戦国、時は雲州出雲の富田城を尼子経久が掠め落とした頃、加古の駅うまやの、儒学によって生きんとする若者丈部左門は、「心に一つとして違ふところのない」魂の双生児、旅の浪人赤穴宗右衛門とめぐり会い義兄弟の契りを結ぶ。赤穴は故郷雲州富田の動静をうかがわんと一旦帰国するが、このひとまずの別れの時に「九月九日」の重陽の節句に再会しようとして約束が結ばれる。雲州富田城で尼子と一見した赤穴は尼子の命で、尼子に引き会わせた従兄弟赤穴丹治（彼は尼子に仕えている）の手によって幽閉され、左門との再会の約束を果たし得ざる状況に陥り、ついに自ら自刃して霊となつて再会の日の夜、左門の眼の前に現れる。その赤穴の、命を捨てて約束を守つた行為——信義を果たした行動に対して左門は雲州に向かい、従兄弟赤穴丹治を難詰、斬り殺して逐電する。

今日のJR山陽本線の快速電車の停まる駅で申しますと、わたくしの参りました岡山から見て姫路駅の次、——東側になりますが、兵庫県に加古川という駅がございませう。時は雲州出雲の富田城を尼子経久が掠め落とした頃——やがて彼は毛利氏と中国地方の勢力圏を競いせめぎ合うことになりませう——要するに世は戦国の世の中、——その加古川の、儒学によって生きんとする若者丈部左門が、「心

に一つとして違ふところのない」魂の双生児、旅の浪人赤穴宗右衛門とめぐり会い義兄弟の契りを結びます。赤穴は故郷雲州富田の動静をうかがわんと一旦は帰国しますが、——このひとまずの別れの時に「九月九日」の重陽の節句に再会しようとして結ばれる約束がタイトルの「菊花の約」です。——さて、雲州富田城で尼子と一見した赤穴は尼子の命で、尼子に引き会わせた従兄弟赤穴丹治——彼は尼子に仕えております。——の手によって幽閉され、左門との再会の約束を果たし得ざる状況に陥り、ついに自ら自刃して霊となつて再会の日の夜、左門の眼の前に現れます。その赤穴の、命を捨てて約束を守つた行為——信義を果たした行動に対して左門は雲州に向かい、従兄弟赤穴丹治を難詰、斬り殺して逐電する、という話です。

いかがでしょう。こう、あらすじとしてしゃべつてしまふと、何の問題もないわかりやすいストーリーのように思われます。むしろよくある話だ、とか思われてしまうかも知れません。あらすじは要約ですので、どうしても要約者がすじを通してしまいますし、具体的なエピソードをほとんど落としてしまつての話ですので、実際のテクストを相手にするとこうは行かず、読み取りに問題が出て参ります。要約者というのは、翻訳者以上に裏切り者です。

なおかつ、「菊花の約」の場合は、論文を読むと印象が

ガラリと変わる、テキストが面貌をガラリと異にする、というところがあるように思います。

それは、明らかに「テキストを邪推して読む」とでも言うべき行為が行われているからです。

三―問題一、左門（および赤穴宗右衛門）は理想の人物として描かれているのか

と言いますのも、これまでの「菊花の約」の研究史で大きく印象に残る問題として、左門（および赤穴宗右衛門）は理想の人物として描かれているのかどうかという問題があります。

従来は左門・宗右衛門を信義に厚い人物と見ておりました。

テキストからざっと書き出してみます。

○博士あり。清貧を翹あはまひて、友とする書かみの外はずべて調度の絮わづらひ煩わづらひを厭いとふ。

○病を看ること同胞のごとく、まことに捨てがたきありさまなり。かの武士、左門が愛憐あはれみの厚きに泪を流して

○（左門曰）「見るところを忍びざるは、人たるもの心なるべければ厚き詞をさむるに故なし。

○（宗右衛門曰）「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。

○（左門曰）「赤穴は信あかなある武士まことなれば必ず約ちかひを誤まちがらじ。

○（宗右衛門曰）「賢弟が信まことある饗あむじふり応あむじふりをなどいなむべきことわりやあらん。

○（左門曰）兄長赤穴は一生を信義の為に終わる。

○互いに情まじをつくして赤穴は西に帰りけり。

○尼子経久、このよしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。

このように左門は「清貧」無欲の「博士」ですし、旅中病に倒れた宗右衛門を看病す「ること同胞のごとく」「愛憐の厚き」と語り手に表現される人物、もちろん、作中彼らが「見るところを忍びざるは、人たるものの心なるべければ厚き詞をさむるに故なし」とか「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず」とか、恥ちかずかし気もなく真顔で会話する台詞を、こうしてテキスト世界から離して写し取り、公衆の面前で読み上げる、などという段になりますと、やはり「恥ちかずかし気もなくよくまあ平気でこんなことが言えるな」とか思ったりもしますが、読み手としてテキスト世界に立ち合っている（語り手の語りに集中的に意識を集めている）うちは、その世界の通り相場と申しますか、平均値と申しますか、それが当たり前のことのように思われ、そんな感情が頭をもたげることもありません。

確かに彼らは「赤穴は信あかなある武士まことなれば必ず約ちかひを誤まちがら

じ。」とか、「賢弟が信まことある饗あむじぶり応をなどいなむべきことわりやあらん。」とか、「兄このかみ長赤穴は一生を信義の為に終おわりわる。」とか、これまた、テクスト世界から離れて引用しますと、「馬鹿野郎。恥ちずかし気もなく自分たち同士で言うな」とか思いますけれども、これもまた、このテクスト世界では、ごく当たり前の、空気のごとき発話頻度です。で、まったく気にもならない、——どころか、彼らは語り手によつても「互まこといに情をつくして赤穴は西に帰りけり」とか、「尼子経久、このよしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤あつきをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり」とか言われて、その信義が疑いもなきものであることを認定保証されていると思われのです。

ですから、これを普通に真に受ければ、左門・宗右衛門を信義に厚い人物と見るのが至極普通だと思えます。大正年間の佐藤春夫・谷崎潤一郎も昭和三十年代の日本古典文学鑑賞講座及び鑑賞日本古典文学の中村幸彦氏の本文鑑賞もそう見ておりました。

佐藤春夫氏の表現を紹介しておきますと、「これはただ信義を高潮した叙事詩である」(「あさましや漫筆」日本文学研究資料叢書『秋成』有精堂。初出、雑誌『世紀』大正十三年十一月)。——これらの両月高評価に対して異説を唱えた——この異説は、私の勤務校のフランス文学の先生ですら知っているほどにかなり有名な説のようですが、

——松田修氏ですら、意外と言えれば意外なことに彼らの看板が揺るぎなき信義の権化であるということ自体に疑いをさしはさんではおられません。

中村氏の日本古典鑑賞講座は昭和三十三年、松田氏の論文(後掲)が昭和三十八年、昭和三十年代までのことです。

しかし、それに対して、松田修氏の指摘が引き金となつて、彼らの唱える「信義」を胡散臭いものとみなす説が唱えられます。この立場を取らない限り、これまでと異なる見方ができないせいか、松田修氏以降の論文で、あるいは、昭和五十九年の木越治氏の論文以降は特に、この立場を取らない論文の方が少ないくらいだと思いますが、それらを簡単にまとめると、彼らの人格を問題視するものと言つて好いと思えますが、要するに左門は、自己の価値観にとらわれた、——感情的で、何についても母親の出でくる母親の庇護から抜け出せない幼児的性格で、書物の世界の住人で、現実というものを知らず、その頭脳の中では書物に記された理想が観念的にぶくぶくと肥大化しており、彼は狭量で偏頗で、自己の価値観に囚われすぎる余りに、義兄弟宗右衛門が帰ってくる日を一日に定めさせ、そのせいで宗右衛門を死に迫りやり、また、強い者に付く、ごく普通の平々凡々たる人間にすぎない赤穴丹治を、自己の論理を押しつける難詰の末に殺人するにいたる、「菊花の約」は性格の悲劇文学だと言うのです。

しかし、これは一体何が行われているのでしょうか。

テキスト自体は、すなわち語り手は、左門のことを「幼児的だ」と言ったわけではありません。左門が母親と住んでおり、学者であり、作中でよく泣く、等々といった、いわば状況証拠によつて左門は「幼児的」であると判定され、「幼児的」といった言葉、語り手の自白もないのに、左門は「幼児的」と断罪されているのです。

つまり、語り手は、左門が母親と住んでいる等々の事実を述べているにすぎません。

論者たちは、左門が戦国という時代に合わない、儒学という理想的書物の世界にとらわれた非現実的な人間だとか言いますが、実際には、左門は儒学という、現代という時代に合わない学問を信奉する人間だから断罪されているという事実関係にあるのではないのでしょうか。

たとえば、木越氏の論文では

「何某」の主人も佐用氏も、左門らに対して好意的であるにもかかわらず、必要以上に不当な扱いを受ける姿が描かれている（木越治氏「菊花の約」私案）同氏『秋成論』ペリかん社、平成7年。初出『国語通信』268号、筑摩書房、昭和59年9月）

とか言われておりますけれども、本当にそうでしょうか。本文に登場する順序で言えば、まず本文最初の左門とその母の為人とその清貧について紹介した箇所、佐用氏につ

いて次のように触れられております。

（左門の）季女なるものは同じ里の佐用氏に養はる。

この佐用が家は頗る富みさかえて有りけるが、文部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢事に托せて物を餉るといへども、「口腹の為に人を累さんや」とて、敢へて承くることなし。

これを木越氏は「必要以上に不当な扱い」と言うのですが、本当にそう言えますでしょうか。左門は物を受け取らないだけです。立派に自活できている以上、人から物を受け取るのが受け取るまいが勝手なことで、受け取らなければ失礼などというのも余計なお世話、受け取らなければ「偏屈」だとかいう決めつけは必ずしも公正な評価とは言えません。

テキスト「口腹の為に人を累さんやとて」の「とて」も曲者で、これは発言とも心内語とも取れますし、発言であったとしても佐用氏あるいはその使いに対して言ったものかどうかはつきりしません。文部母子の家庭内での会話という可能性もまたあるのです。この辺りがはつきりしないということは、これは語り手が文部母子の行為に対して付した注釈的説明である可能性が濃厚で、われわれはこれが元来鉤括弧で会話あるいは心内語であることが明示されない習慣上——つまり鉤括弧はわれわれ近現代人の便宜で付けられているものにすぎず、鉤括弧を付けることをまっ

たく考えていない、会話・心内語を必ずしもくつきり分けようなどという想定のない習慣下で記された文章であることを忘れてはいけないのだろうと思えます。

そして、木越氏の言う「必要以上に不当な扱い」などではなく、左門はあるいは佐用氏の期待通りの反応を示しているのではないのでしょうか。「それでこそ左門」と、佐用氏は心の中で快哉を叫び、佐用氏の中で左門の株はさらに上がっている可能性の方がはるかに高いように思います。だからこそ、断られるのを百も承知で佐用氏は性懲りもなく「しばしば事に托せて」何度でも物を贈り続けるのではないのでしょうか。佐用氏はテクスト世界の中で、左門に断られるために喜んで物を贈っているのです。

また、木越氏が、左門に不当な扱いを受ける人物としてあげていたもう一人の人物「何某」の主人に対する言動については、松田修氏がすでに問題にしていたことです。

何某の主人とは、左門と同郷、博士左門がその家を訪れて昔今の話をし、そして、その対談に興を生じるくらい話のできる人物です。旅の武士赤穴宗右衛門に一夜の宿を貸し、その夜発病し寝込まれ、主人のところに話をしに来た左門が、赤穴の存在に気付いて手を施すことによつて左門と赤穴が出会うという、結果的にこの人がいたから左門と赤穴の出会いが生じることになった人物ですが、その彼に對する左門の不当な仕打ちとは、松田氏の説明によれば次

のような次第を言います。

左門は、訪問先で、病める漂客の話を聞く。「邪熱劇しく」あるじも今はほとほと、困じはてている。左門はこの病客——赤穴をみまおうとする。あるじは「瘧病は人を過つ物と聞ゆるから家童らもあへてかしに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふことなかれ」と止める。それに対して左門はどのように答えたか。

左門笑ひていふ。「死生命あり。何の病か人に伝ふべき。これらは愚俗のことばにて吾們はとらず。」

「これら」とは何か。いうまでもなく、今あるじの述べた、「瘧病は人を過つ云々」の言葉を指す。あるじが左門を諫止したその言葉を、左門は「愚俗」のやからの迷蒙論として、一蹴しているのである。左門の瘧病観の正否は問題ではない。「愚俗」に対する「吾們」の優越感の性格も今はとかない。対談している当の相手の言葉を「愚俗のことば」と笑いさる、ここから左門の直情と径行をよみとれるにせよ、その直情と径行は、やはり偏奇と紙一重のもの、いな偏奇そのものである。あながち、今日的な立場から見ずとも、それはたしかに非常識であり、愚かさでさえある。(松田修「菊花の約」の論——雨月物語の再評価(2))『松田修著作集』8、右文書院、平成十五年。初出『文芸

と思想』昭和三十八年二月)

松田氏はこの左門の「偏奇・迂愚」を指摘して、それがこの作品の主題である信義の具現を不完全化するもののごとくに論ずるわけですが、これもまた、そのような言葉に当たるとは思われぬ。

おそらく左門の笑いは、松田氏が取るような、対談している当の相手の言葉を嘲笑する笑いではない。おそらく左門はさわやかに笑ったのです。それがこの作品の呼吸というものだろうと思う。語り手に左門を陥れる悪意はまったく感じ取られない。だとすれば、左門はやはり普通一般人なら恐れる伝染病に立ち向かう勇気を、この笑いによっていささか読者に伝えられようとしているのでしょうか。つまり、左門はまったく病が人に伝染することはないように言っているが、この言葉に左門自身どれほどの確信があったのか。

実際、経験的に、病が人に伝染するということを当時の人として事実と認知しているでしょうから、この発言を左門の強がりと読むのが正しいのではないのでしょうか。

なおかつ、左門がこの後に薬を処方し、宗右衛門の病を治しているところからすれば、彼には医学の心得がある。おそらくこの村で彼は他にも治療をし、医者としてもふるまうことがあると考える方が自然で、だとすれば、専門家が、——「瘧病は人を過つ物と聞ゆる」と何某主人も言

っているように、素人が噂で聞いた一般俗説について、「それは俗説だ」と言っているにすぎないのであって、この言葉は何も何某主人個人をおとしめているわけではない。

また、さらに、松田氏の読み取りには、どうしても左門に対する悪意——と言うのが言いすぎであれば、自らの論——自分の意に満たないにもかかわらず、世間で完全無欠のように言われる「菊花の約」の高い評価に汚点を付けること、に都合の好いように話を持って行くための、ためにする読み取りの気配を感じざるを得ないのは、この箇所にも続く箇所の読み取りにあります。

この箇所にも続く箇所を解説して、松田氏はやはり左門の非常識を印象づけようとするのですが、そこでは次のように言っています。

さらに、左門は赤穴を看病し、その病気もようやく癒えようとする。その時左門が赤穴にいう、「猶逗留^{とど}りていたはり給へ」とは、いかがであろうか。赤穴は、あるじにとつては、まさに招かざる一介の漂客である。左門が真実親身であるならば、引きとることも考えられるはず。動かせぬ重態の状況はもう終っている。しかも他人の家を我がもの顔に、もつと逗留して養生せよという、それは右にのべた、偏奇と愚かさに、あい対応する言動ではあった。赤穴がいよいよ全快したので、二人は「日夜交はりて物がたり」するのであるが、

その場所は一切どこなのか。依然「愚俗」と左門が笑った主人の、物質的な犠牲において、二人の交友は麗しくも成立しているのである。義兄弟となつたあとさえ、左門は容易に赤穴を自家に案内しない。左門の母を拜することを赤穴が希望して始めて、「伴ひて家に帰る」のである。これもまた、世事にうとい儒者の性格に、ありがちなこととして考えるべきであろうか。

いや、いかにしても、それは偏奇であり迂愚である。よしそれらがすべて誤解・誤読であるとしても、作者の意図を越えたそのような逸脱した読み方を読者にさせるのは、秋成自身の責任なのである。

ですが、これはもはや悪意による曲解としか言い様のない、文脈の歪曲であると思います。

左門が赤穴に「猶逗まりていたはり給へ」と言ったのは、テキストでは、いまだ赤穴の「病漸減じてこち清しくおぼえ」た時点でのことにすぎません。松田氏はこの「減じて」を「癒えようとする」と言いかえて「動かせぬ重態の状況はもう終つている」と断じるのですが、「病やや減じ」ただけなら、まだ動かせないのでしょうか。動かせないから、赤穴を自家に案内できないと見るのが常識——なおかつ、わざわざそれ以外の想定をするという方がよほど異常です。松田氏の読みは、そんなことはあり得ない、と言いたくなるくらいにあまりにも不自然かつ偏奇です。

また、松田氏は「赤穴がいよいよ全快したのち、二人は「日夜交はりて物がたり」する」と言うのですが、これもまたテキストとちがって、二人が日夜交わつて物語りしたのは、「病やや減じて」左門が赤穴に「なおとどまりていたわり給え」と言つたその日から、病気が治つてきて、体調が平常に近くなる間のことです。

テキストには次のようにあります。

猶逗まりていたはり給へ——と実ある詞を便りにて、日頃、ひるよるまじ終るまに、物みな平生にな遯くぞなりにける。この日頃、左門はよき友とめたりとて、日夜交はりて物がたりす（傍点山本）

このように、左門が赤穴と物語りしたのは、「日頃終るまに物みな平生に遯く」「な」つた「この」何日間か——体調が平常に近くなるまでの間——のことなのです。考えてみれば、それがもつとも事態の進展として自然なことで、松田氏が考えたように不自然に事態を推移させるよう構想する方が至難の業であり偏奇であると言うべきでしょう。

さらに、松田氏は「義兄弟となつたあとさえ、左門は容易に赤穴を自家に案内しない」と言いますが、左門が赤穴を自家に案内するのは、義兄弟となつたその時の会話によつてで、これを普通に表現すれば「義兄弟となつた直後に左門は赤穴を自家に案内する」としか言い様のないところです。テキストを示しておくのと次のごとくです。

終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、伯氏たるべき礼義ををさめて、左門にむかひていふ。「吾父母に離れまゐらせていとも久し。賢弟が老母は即て吾が母なれば、あらたに拝みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯げ給はんや。」左門歎びに堪へず。「母なる者常に我が孤独を憂ふ。信ある言を告げなば、齢も延びんに」と、伴ひて家に帰る。

すなわち、松田氏の言い分は事実とまつたく異なるものであり、実際には赤穴の病が癒える間に二人は話をして仲良くなり、赤穴の様態が平常に近くなつた時点で二人は義兄弟の盟約を結び、兄弟となつたからにはと、その場で赤穴が母親に挨拶することを望んで、左門は即座に赤穴を家に連れ帰る。——という自然かつ常識的の上ないものであつたのです。

私が松田氏に左門に対する悪意——と言うよりも「菊花の約」をおとしめようとするよこしまな欲望の伏在を感じるのは、このような明らかな曲解か、あるいは、故意の雑な読み飛ばし、としか言い様のないものがこの論文には存在するからです。

したがって、「よしそれらがすべて誤解・誤読であるとしても、作者の意図を越えたそのような逸脱した読み方を読者にさせるのは、秋成自身の責任なのである」と松田氏

は述べられました。が、それらはすべて誤解・誤読であり、作者の意図を超えたそのような逸脱した読み方をした読者の責任ということになります。

きわめて単純素朴なことを申し上げてはなはだ恐縮ですが、結局われわれはまず、テクストを正視し、テクストの意図を汲もうとすることから始めなければなりません。

そして、しかしながら、そのことがまことに至難の業であることを「菊花の約」の解釈史は教えているのです。なぜなら、わたしたちは、すでに自分が知っているストーリーを通して、テクストを見てしまう、ということを経験してしまふ、というよりも、テクストを凝視し正視し続けられない限りは常にすでに知っているストーリーを活用して効率的に読むことを便宜としているというべきだと思いません。

松田氏の場合は、自らが用意した読みにテクストをあてはめようとしていたわけですが、その他の論文を見て行くと、今申し上げたようなことが見えてまいります。

松田論に示唆を得た木越氏以降の論文は、左門は、現実よりも書物の方に価値基準を置くとか、書物の世界の住人だとか、観念が肥大化しているとか、言いますけれども、どれも「菊花の約」以外のどこかで聞いたようなことばかりです。

そして、わたしに言わせれば、そもそも儒学というものは元来そういうものにすぎないということにすぎません。儒学者にとつて価値の源泉は、今眼の前の現実世界よりも四書五経の言葉の方にあるはずなのであつて、現実の前に屈して妥協していく儒学などというものは本来的ではないはずです。良くも悪しくも儒学というものはそういうものでしかないだろうと思います。(だから、四書五経を捨てて町に出てしまうと、名教の罪人と呼ばれてしまいます。)

結局、木越論以降の左門の悪評をささえているのは、実は現代人の、儒学に対する無理解にすぎないのではないか、という可能性があります。

しかも、彼らが読み取るモチーフと来たら、まるで——現実をいまだ知らない、幼児性を引きずつた、世間知らずの優等生の大学生が、『資本論』に書かれていることを鵜呑みにして、観念性を肥大化させ、ついに、本来何の罪もないはずの学生運動の同志を殺すところにまで至つた——と言うがごとき、まるで現代的ストーリー(しかもかなり古びの付いた——少なくとも私などはすでに物心付くか付かぬかの頃のお話)にしか見えないものです。

本当に「菊花の約」がそんなことを語っていると云えるのか。

ここで「菊花の約」テキストの語りの特徴を確認してお

きたいのですが、この左門を良く見るか、悪く見るかの、見方の分岐の問題は、直接「菊花の約」の語りの質に淵源するものと思われま

す。先ほど来、少しずつ引用してまいりましたがところからもうかがえるように、「菊花の約」テキストは、評価的にはニュートラルな事実の報告から成り立っており、主要人物たちを「良く見よ」とか「悪く見よ」という類の読者への指示を含んでおりません。

したがって、左門を良く見るのも、悪く見るのも、同じコインの裏表にすぎない。

魂の双生児が運命的に出会い、肉体的には再会をはたし得ず、半身は自死しての訪問をはたさざるを得なかつた。

その行為に対してもう半身は、その等価値の代償行為として、命を賭しての訪問を果たす、そして、失われた一つの命の等価値の代償行為として一つの命が奪われる、というのが、「菊花の約」のストーリーの構造であつて、本来良いも悪いもなく、ただそれに「信義を果たす」という記号が声高に割り振られるということなのだと思います。

その「声高に」というところが、おそらく現代の読者にはおもしろくなくつて、幼児的だとか、観念的だとか言われることになつて

いる。しかし、「菊花の約」の場合、良くも悪くも言えるのですから、それを、どちらで言うか、を争つたところで仕方

がなかりうと思ひます。

四―問題二、冒頭末尾のくりかえしと本話の関係
↓「軽薄の人」さがし

しかし、それにしても、声高に言い立てられる「信義」というものが理想に類するものであるから、善し悪しの問題を招き入れてしまいがちになる。

しかし、それは、要するに、ストーリー展開のために必要な記号であつて、これを重しとする左門は、一方において赤穴と出会うまで「孤独」だったとテクスト中に明言されている。

これは元來、ある理想を体现し得る人間などほとんどいないのだという話にすぎない。

すなわちこれはきわめて稀にしかない話「稀談」という意味合いにおいて古今の「奇談」「怪談」——これは『雨月物語』の角書き——なのです。

これは木越氏の論の中にも含まれている論点と言えまして、木越氏は左門も赤穴もきわめて特殊な人間なのだ、と主張している。そして、そんな彼らをととても理想とするわけにはいかない、というわけです。

しかしこれはなぜ、いい大人もいい大人、しかも論理的客観的であることが表看板の研究者が、作中人物を理想とするのしなないのと思春期の若者めいた話をしなければなら

ないことになるのか。

それは、「菊花の約」というテクストの特殊な要素、本話の前後に語り手が発する教訓めいた言辞が付いているところから発します。

これまで、本話の読み取りの問題に話をしぼりたかつたので、このことに触れてきませんでした。これが「菊花の約」テクスト中に含まれるほとんど唯一の、読者に対して作中人物を「良く見よ」「悪く見よ」という指示に類する語り手の発言ということになります。

「菊花の約」冒頭が(一)、続く(二)が「菊花の約」の末尾です。

(一) 青々たる春の柳、家園に種ゆることなかれ。交はりは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐へめや。軽薄の人は交はりやすくして亦速やかなり。楊柳いくたび春に染むれども、軽薄の人は絶えて訪むらふ日なし。

(二) 尼子経久、このよしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。吝軽薄の人と交はり結ぶべからずとなん。

冒頭の教訓(一)だけなら、谷崎潤一郎の言つた本話との対応、——冒頭のこの語で、作中軽薄の人が出るはずとの予想を読者に与えておいて、赤穴の出雲帰郷と約束の日、夜に至つての帰還によつてその予想が心地よく裏切られる

効果を持つ冒頭——というだけで話は済んだかもしれないのですが、末尾（二）にもう一度「軽薄の人と交わりは結ぶべからず」と教訓が出ます。しかも思わせぶりに「ああ」と語り手は感嘆までもいたします。

この末尾にこの教訓の語が再び登場する意味をとらえるのが存外むずかしい。

佐藤春夫が谷崎との「菊花の約」に関する対話について紹介する、ごく短い随筆「あさましや漫筆」（前掲）には、この末尾に関して谷崎は「吝、軽薄の人と交わりは結ぶべからずとなむ。と切つたのもいい……」と言つたことしか紹介されておらず、「いい」では評価判断の結果しかわかりません。

佐藤は佐藤で、谷崎の話がここまで来て、自分が「単に感じたにすぎなかつたことを、潤一郎が詳しく説いて聞かせたのに推服しながら、自分の思つてゐることが、全部言つてしまはれさうなので、大急ぎで」

「さうだ。さうだ。最初と最後が同じ意味になつてゐる。前後で軽薄な人間を直接にたしなめて置いて、内容はその反対の実例を見せてゐるのだね。我々は読み去つて、最後が最初と同じなだけに、もう一ぺん、書き出しに返つて来たやうな気がする。さうして、最初は単に物好きな緊張で読んで来たものを、今度は純然たる深い感動で、もう一ぺんゆつくり味ひ直す。——

かうしてあの話の気持は、頭も尻尾もない、無限にめぐる不思議な一つの環だ。永久に消えないやうな余情を湛へてゐる……」

と「喋」つ「た」ことを続けて記しておりますが、これは「効果」と呼ぶべきもので、残念ながら意味の読み取りを説明したものではない。この後（二）も佐藤は「菊花の約」について文章を書いておられますけれども、基本的にはこの線の発展ですので、これ以上佐藤には拘泥する必要がありません。

この言葉は本話の末尾です。本話の内容を引き承けてしまします。

で、「軽薄の人」というのは誰なんだ、というので、これをいわゆる「軽薄の人さがし」ということが始まります。さらには、語り手が感嘆までする理由も、やがて合わせてさがされるようになります。

「軽薄の人」とは明らかにマイナス評価です。登場人物のいずれかを「悪く見よ」との語り手の指示となり得ます。くわしい紹介ははぶかせていただきますけれども、それはもう主要登場人物それぞれについて「軽薄の人」説が存在しています。

左門によつて斬り殺される、宗右衛門の従兄弟赤穴丹治が末尾の語の「軽薄の人」という説は、大正年間の注釈書

鈴木敏也『雨月物語新釈』（富士房、大正五年）に記されると同時に同書中においてすでに疑問視されており。一編中それほど重みを持つ人物ではないというのです。そして、やがて左門・宗右衛門の人格ならびにその信義を疑わしく見る立場の登場から必然的に左門「軽薄の人」説、左門・宗右衛門「軽薄の人」説、宗右衛門「軽薄の人」説が生成されてきます。

しかし、これらの説も簡単に言ってテキストとの対応が見落とされている点があつて、頭脳というものを持ち、すでに経験によるさまざまな認識パターンというものを所有している人間にとつて、成心なくテキストを凝視し正視し続けることがいかに難いかということをおわれに教えてくれます。

論者はそれぞれに末尾の教訓から思考が始まりますので、冒頭の語り手の言葉に「軽薄の人は絶えて訪むらふ日なし。」とあるテキストの出発点を忘れてしまいがちのようです。

軽薄の人は絶えて訪むらふ日がないのですから、この時点で語り手が意識する「軽薄の人」判定は再び訪れるかどうかに関わっている人物であることにまちがいはありません。また、軽薄の人は絶えて訪むらふ日がないのですから、常識的に考えれば、作中壺体となつてまで再び訪れた宗右衛門が軽薄の人であるはずはありません。

一方、末尾の言葉には、この訪むらふ日のありなしが付随しておりませんから、その判定基準からは解放されておられます。したがつて、本話中をさがしもとめてそれらしい人物をさがしもとめてもいいのですが、赤穴丹治は、最後の場面だけの登場で、読者がその「交わりを持った」実質を実感できるほど作中に登場しません。だからと言つて、赤穴宗右衛門が「軽薄の人」というのは、冒頭の言葉との関係が消えるわけではありません。成立し得ません。それでは「左門」しか残る人物はいないことになりませんが、これもむずかしいと私は思つております。

左門が「軽薄」という人々は、左門が世間知らずで、その頭が書物の世界にとらわれていて、観念のみが肥大化しており、現実というものを知らず、そのことが原因となつて、義兄弟を死に追いやる約束を結ばせ、さらには書物にとらわれた理屈を立てて殺人を犯すにまで至る、そのことが「軽薄」だと言つたのですが、さて、今言つたようなことからは成心なく「軽薄」という表現と直結し得ますでしょうか。

頭が書物の世界にとらわれていてそのことできわめて悲劇的な事態が引き起こされる、その原因を「軽薄」と表現し得ますでしょうか。また、彼が立ち至つた結果を「殺人」としてとらえるなら、それはきわめて深刻な事態であると

申すべきで、「軽薄」という軽い薄い語感とそぐわない事態なのではないか、というのが率直な印象です。

また、近年では「軽薄の人」さがしは「菊花の約」の原話である短篇中国白話小説の登場人物にまで遡る案が^(編四)出されております。

「菊花の約」が「范巨卿雞黍死生交」の作りかえであることは戦前から知られておりますが、その原話の登場人物の交わり方が軽薄で、それを理想的交わりにかえたのが「菊花の約」だと言うのです。この案は、「菊花の約」のストーリー展開の特定の部位と関わりを持ちませんので、その点、抵抗感のないアイディアです。しかし逆に、ストーリー展開の特定の部位との関わりを持たないということは、必ずそう考えなければならぬ理由をもまた持たない、読者の頭がそこに導かれる指示がテキスト中に、全くと言って好いほど存在しない。案と言わざるを得ないと思えます。このアイディアが、「軽薄の人」さがしも押し詰まった近年になるまで出て来なかつたのもそのせいではないか、と思います。

結局「軽薄の人」さがしは、その答えを導き出すことができない、成立しない問いなのだろうと思えます。

「そういう意味で、この末尾の言葉が付けられたわけではない」ということを「軽薄の人」さがしの不成立は意味しているでしょう。

これまでに「軽薄の人」をさがさずに末尾の教訓の意味を考えた人は、ひよつとすると木越氏しかないかもしれません。

木越氏はこの末尾に教訓がくりかえされる意味を問い、本話が特殊な人物たちの特殊な物語であることを語って、結果、この教訓は無意味化するという結論を導き出しました。

左記がその結論です。

「軽薄の人と交わるべからず」という教訓に冒頭部と末尾をはさまれたこの物語が、もしも理想的な人物による理想的な物語として書かれていたならば、それら^はごくまっとうな教訓としての効果を發揮したことでしょう。しかし、この物語はすでにみてきたとおり、人物も状況もきわめて特殊なものとして書かれているのです。その意味では、この物語は「信義」がいかに大切であるかということよりもむしろ「信義」を全うすることが一般の人間にとつていかに困難であるかを語るものです。ここに描かれている「信義」とは、「信義」の觀念にとりつかれ「生」のすべてをその一点に凝集しうる者、あるいは自らに課せられた「信義」を果たすことより他に自己の生存の場所を見出しえない者以外には実現不可能なものなのです。

このとき、冒頭部と結語に含まれる教訓はほとんど色あせ、無意味化されてしまうのではないのでしょうか。一般化・普遍化しえないきわめて特殊な「信義」の物語が語られたあとで、

吝軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなんどくり返してみても、それは空しくひびくだけです。

そして現実の読者には、かえって彼ら自身が他ならぬ「軽薄の人」であることに気づかざるをえず、それと交わりをむすばずに生きていくことが不可能であることを知らされるだけなのです。

いわば、「信義」のテーマを極限まで追い込んでいった結果、一般の読者の前には、否定されるべきはずの「軽薄の人」の現実性がかえってあざやかに印象づけられることになってしまったのです。

と。
ロラン・バルトに始まる読者主義的居直りを通過して、その衝撃性にも免疫の生じてきた今日これを見ると、これは実に興味深い結論です。すなわち、これは読者にとって冒頭部と結語は教訓として機能せず、無意味なのだと言っているのですが、読者にとって無意味だと言っているという事は、すなわち語り手にとってこれが教訓であることはずでに前提されているということなのです。

つまり、読者にとっては無意味な教訓であるかしのれない

けれども、この結論では語り手がこれを教訓として語っていること自体は否定されない、——どこるか肯定されるしかない、ということなのです。

もう一度言い直すとこうなります。読者にとっては無意味かも知れないが、無意味な言葉が吐かれるなどということとはあり得ない。語り手が自覚的に意図して無意味な言葉を吐くという事は、このテクストにおいてはあり得ない。

——と言えるのは、この作品には実験的作品である気振りすらなく、ノン・センスな箇所が存在しないからです。つまり、これが教訓だった場合、読者がいかに自らが「軽薄の人」の側にすぎないことを自覚し、落胆せざるを得なくなつたとしても、語り手は本話のごとき特殊な人間補注のよう

に生きる、と言っているということなのです。そして、木越氏はテクストで語られる教訓は普通の読者が実行できるようなものでなければならぬと考えておられるようですが、高い理想とは本来そのような、普通の人間を置き去りにして存在するものなのではなかつたでしょうか。逆説的かもしれませんが、理想とは普通には存在しないからこそ理想なのです。理想とは現実と遊離して存在しがちなものなのです。

さて、——しかし、——ここで立ち止まって引き返して考えますと、そもそも、本当にこの言葉は「教訓」なので

しょうか。

みなさま、おそらく突然何を言い出すのか、と思われ、あるいは、これまで述べてきたことと矛盾しているように聞こえる可能性もなきにしもあらずですが、しかし、わたしはここまですべて通常の論にしたがつて、ひとまずこれを「教訓」と呼び、これを「教訓」として扱う立場に立つて考察をしてまいりました。しかし、ここで前提に立ちもどって考えますと、なぜわたしたちはこれを「教訓」だと思つているのでしょうか。

実は、おそらく、これを必ず「教訓」だと考えなければならぬ必然的な理由はありません。ここでもおそらくわれわれの経験知は、テキスト読み取りに介入してしまつていて、説話等の形式からの類推が働いてわれわれはこれを「教訓」であると即断してしまいがちなのだと思いますが、
吝嗇薄の人と交はりは結ぶべからずとん。

これはまずもつて感嘆です。そして、この「とん」は、時折論文で言われるような「伝聞」の「と」ではありません。なぜそう言えるのか。このテキストの場合、忘れてならないのは、これがくりかえしであつて、冒頭（前掲、本節最初の引用（一））を見れば、こう言つたのが誰かということは明らかだということです。

交はりは吝嗇薄の人と結ぶことなかれ。……吝嗇薄の人は交はりやすくして亦速やかなり。……吝嗇薄の人は絶え

て訪むらふ日なし。

は伝聞でも何でもなく、冒頭のつけからの語り手の断言です。したがつて、末尾の「ああ「吝嗇薄の人と交はり結ぶべからず」とん」の下に省略されているのは、高校の古文の時間の古典文法問題的通例とまつたくちがつて、また、「語り伝えたるとや」とかでもなく、「私は最初に言つておいただろう」という内容なのです。

つまり、これは一般的教訓でも何でもない可能性を持つ言葉です。始めつから語り手が勝手にそう主張しているだけのこと、この語り手の主張を信頼してこれを「教訓」とするかしないかは受け取り手側の問題にすぎません。

もちろん、これが一般的教訓でなくなつたところで、まだ、これが末尾にくりかえされる意味が判明したわけではありません。

話はまだこれから読みを入れることを必要とします。

本節最初の引用（二）には、文脈が理解できるよう、前もつてこの末尾の一文よりだいたい前のところから引用を始めてあります。

これを言つてしまうと、これまでの論者たち数多くの攻撃にも関わらず、かなり抽象的な論議が展開される分、逆説的に比較的高め安定で推移してきたと言えるだろう。「菊花の約」のいわゆる「文学」的価値が目減り、あるいは大暴落してしまうのかも知れないのですが、これはリアリズム

ム的立場からはおよそ許しがたいであろう徳行感応譚なのです。

左門の言動に疑いを抱いていたのではそのところの脈絡は絶対に読み取れなくなってしまいますので、この箇所についても尼子経久の性格に一貫性がないとか、すでに批判が出ておるところです。

と申しますのは、この箇所では尼子は「兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強いて逐わせ」なかつたとされているのですが、これより以前、作中、霊体となつた赤穴宗右衛門の帰還報告によれば、尼子は「よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし」。あらくれ武士を手なずける手管はあるが、きわめて猜疑心の強い人間で、人間的信頼関係が成立しない、と観察されているのです。

これが作中人物の人間性に一貫性を欠き、作品の欠陥の一つとなつている、というのが、「菊花の約」テキストの人物設定に狐疑の心多い論者の指摘だったのですが、リアリズムで考えるところなるとそうなるか知りませんが、こういう指摘の危険なところは、裏を返せば、それではテキストの理解が成り立たない、論者の誤読にすぎない、ということである可能性を常に孕んでいるということです。

そして、この問題の場合、そんなわかりやすい矛盾に気が付かない作者もいらないだろうと思われような矛盾でし

て、人物設定の矛盾としてではなく、このまま意味の通じる読みを提示できた方が、まちがいがなくテキストの読解として正しいということにならざる得ないと思います。——実は、このテキストが言っているのは、兄弟信義の篤さによつて、猜疑心の深い尼子経久ですらも心動かされ、左門の跡を追わせることをしなかつた。——という、左門たちの信義に疑いをさしはさみたい人間たちからすれば眼を覆いたくなるであろう説話的結末なのです。

そして、あるいはこれは、この作品の文学的価値の目減りを思えば、悲しむべきことなのかも知れないのですが、こう理解すれば、末尾の文が語り手の感嘆である理由もはや説明の必要もないと思われるほど、おのずからに明らかです。

語り手にとつてもまた、感嘆すべきことが起こつたのです。それは、猜疑心の深い尼子が左門の追手を出さないなどという、およそあり得べからざる事態です。

ああ、だから言つたじゃないか。「軽薄の人と交わりは結ぶなかれ。信義の交わりをせよ」と。と、いうのはこういうことが起こるからなのだよ。

と語り手は、みずからの断言の正しさが証明された愉悅にひとりつつ、読者に対して言うのです。

何たる陳腐。何たる常套。しかし、わたくしとしてはこの現実から眼をそむけるわけにはいきません。今や「菊花

の約」の文学的評価の高め安定は、松田修氏が指弾したのとまったくちがう観点で見直されなければなりません。

もはや蛇足気味ではありますが、本話の末尾部分の読み取りに関しては、さらに補足しておくべきことがらがあります。

城から脱出した左門のその後に関して、左門に疑いを抱く人々は、その後の左門は一人で現実と向き合つて生きて行かざるを得なくなるはず、といった左門の成長物語を後日談として夢想するのですが、これまた、経験知の介入による想定で、これも語り手によつて想定されている後日談——すなわちテクストに内在する後日談はそうではない、と言わざるを得ない。

左門は赤穴の霊体となつての帰還によつてその死を知り赤穴の故郷出雲に立出する際、母親に次のように言い残して家を出ています。

「公尊きみおほしむ体を保ち給うて、しばらくの暇いとまを給ふべし」。

老母云ふ。「吾が児こかしこに去るとも、はやく帰りて老が心を休めよ。永く逗とどまりてけふを旧ひよしき日となすことなかれ」。

左門いふ。「生しやうは浮きたる瀾あわのいとく、且あまにゆふべに定めがたくとも、やがて帰りまゐるべし」とて、泪を振るうて家を出づ。

「しばらくのいとまを給うべし」「はやく帰りて老が心を休めよ。永く逗とどまりてけふを旧ひよしき日となすことなかれ」「やがて帰りまゐるべし」この会話を見、末尾の城から脱出して、尼子の追手もかからぬ記述を見て、左門が帰郷しないなどという読みの成立する余地があるのでしようか。佐藤春夫氏は、末尾のくりかえしは読者の頭を冒頭にもどすと言っていました。強いて言うならこの機能によつて、左門も冒頭の故郷加古の、赤穴と出会う前の、共同体でそれなりの位置を得た、孤独だが平穏な生活にもどることになるのではないでしようか。

ここまで、行きがかり上、テクストの具体的な読み取りについて多くを述べることになりましたので、最後に「菊花の約」テクストに好意的な中村幸彦氏によつても不明とされた左門出雲行きの動機について説明を補足して、ひとまず本日のお話を終わりにしたいと思います。

結局、これまで見てきたところを通して感得していただけのではないかと思ひますが、事実を報告することに意を注いで、その意味合いを読み取るべき方向を読者に指示しないようつとめる「菊花の約」テクストの語りが、このテクストを理解しづらくしています。

この簡素な事実説明からなるテクストは、その素朴な外見とは裏腹に——と言うよりも、饒舌でない分、言語化さ

れない空白部分が多くなるわけですから、当然に、——もろもろの事実をどう意味づけるか、という点においてまるでちがう人物像を結んでしまふに至るところまで、事実を提示するにすぎないテクストと言えるでしょうか。

左門が出雲に向かわねばならない理由もよくわからないと言われております。次のは中村幸彦氏の鑑賞講座の文章、

出雲へ行く左門の行動には、原話の友の霊の依頼というごとき説明がない。直情径行、友の死の地を見ないではおれない心情にかられたと解すべきか、はじめから赤穴丹治への復讐を心がけたか明らかでない。丹治への復讐と解すれば、どうもちよつとそぐわぬはずれな気がする。秋成が左門を、そうした性格と写しているの見て来た私は前者と解しておく。(昭和三十三年発行の日本古典鑑賞講座第二十四巻『秋成』(角川書店)も、その新装版である昭和五十二年発行の鑑賞日本古典文学第35巻『秋成・馬琴』も同一版面で、したがって文章も同じである。鑑賞日本古典文学版で増補されたのは、日本古典鑑賞講座版の頁の余白部分を使って増やされた左門男色説を否定する言のみである。)

この問題は、左門の信義を疑う人によって別の言い方がなされております。いわく、左門は出雲に下る際に「小弟けふより出雲に下りせめては骨を蔵めて信を全うせん。」

と母親に言っているのに、出雲に下り、富田城の赤穴丹治に面会の際には宗右衛門の骨のことをたずねてもない。そうして問答しているうちに突如丹治を斬り殺してしまふ、と。左門は激情に駆られる、きわめて子供じみた人物である、と。

中村氏の説明にある「原話」とは、先にも話題に出た短篇中国白話小説「死生交」ですが、それには、自死した宗右衛門に当たる人物の霊が、故郷で執り行われる自分の葬式に来てくれるよう依頼する発言があることを受けての旅であることを言っておられます。

宗右衛門の霊に依頼を受けて出雲に下るのであれば、その理由に何の疑問もないが、左門の場合、出雲に下らねばならない理由は必ずしも明白ではないというわけです。

テクストに理由の説明に当たる箇所は、今しがた御紹介申し上げた左門の「せめては骨を蔵めて」しかございません。「せめては骨を蔵めて」ですから、左門批判論者が論断するほどに、事はくつきり矛盾しているわけでもなく、「せめて」もの行為が「骨をおさめる」ことなら、それ以上の行為がほかにあることを、テクストは含んでおります。そしておそらくは、この部分を見れば出雲行きの説明が

書かれてあるはず、というのは、誰にでもわかるように書かれる親切な今日のテクストの読みによって育まれたわれわれの習性にすぎないもので、ここで言葉で説明しなく

とも分かれるはずの理由というか、それこそ論者によっては「特殊」をうたわれる左門と宗右衛門独自の論理というものが存在しているのであらうと思います。

そもそも「菊花の約」の「信義」行動は、「報う」という行為ときわめて密接に関連を持っている。

宗右衛門は左門に手篤い看病を受けた時点で、すでに「死すとも御心に報いたてまつらん」と言っています。至極単純でわかりやすい話ですが、拾われた命なのであるから、それを捨ててようやくイコール、等価交換になるにすぎない、というのがこの「報う」ことの論理です。そして、実際、赤穴は死んで左門に報いたというのもすでに諸氏の指摘のあるところではあります。

左門は、先の出雲下りの意志表明発言の直前に「兄長赤穴は一生を信義の為に終わる」と言い、直後に先のせりふ「小弟けふより出雲に下りせめては骨を藏めて信を全うせん」が続きますが、宗右衛門がその一生を信義のために終わったと判断されるのに、先の予言を実現したことも関係しているものと思います。

左門が赤穴の一生を「信義のために終わ」ったと判断する表面上の理由はもちろん、死んでまでも(手段を選ばず)、約束の重陽の佳節その日のうちに、日をあやまることなく加古の駅に帰る、という左門との約束を守った信義なのですが、ほかに、先の発言「死んで左門に報う」と誓った

言葉を実現した信義にもなっているのです。

それに続く左門の台詞が先の「小弟けふより出雲に下りせめては骨を藏めて信を全うせん。」で、語りの力点は「信を全うする」ということの方にあります。左門批判論者がとがめだてする「骨を藏める」ことは「せめて」もの行為、「信を全うする」行為はほかにもあるというわけです。それが何かは、当然その後の左門の行為が語っていると言えるわけですが、左門の論理があまりに単純すぎるがゆえに、かえって複雑な現代人には想定不能で理解できず、論者の注意をひかない、(心ここにあらざれば見れども見えぬ)左門の出雲下りの理由を説明する発言が実はもう一ヶ所あります。それは宗右衛門の従兄弟赤穴丹治に面会して最初に言った言葉、

「士たる者は富貴消息(「消息」の意味は、一般的には「盛衰」ですから、個人の身に関わる「盛衰」はすなわち「地位」の意で用いられていると理解されます。)の事、ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約を重んじ、むなしき魂の百里を来るに報いすとして、日夜を逐うてここにくだりしなり。」

ここにやはり「菊花の約」の「信義」行動のキーワード「報い」が出来ます。

人間は意味のわからないことは理解できないわけ、こ

ここで述べられているのは、このままこの通りのこと、現代人はこの他に何か「報い」に当たる行動があるものと瞬時に考えてしまいがちですがそうではなく、義兄宗右衛門が信義を重んじて、魂となって百里を来た、その等価の返報行為として出雲に下つたのだ、という論理なのです。

そうしてみると、先の出雲に向かい出立する直前の「小弟弟より出雲に下りせめては骨を藏めて信を全うせん。」について、先に「信を全うせん」に重みがあるのだと言つた私の説明には実はその理解に足りないところがあつて、「小弟弟より出雲に下り」「信を全うせん」がイコールだつたのです。

これはほとんど心意気だけの行為、現代人にとっては無意味に近い行為です。

左門にとつて、等価交換が信である以上、出雲に着いて赤穴丹治と面会して発見した「骨を藏める」以上の「信の全うし方」(おそらく出雲に着くまでに十日を要してしまから宗右衛門の骨は埋葬されてしまつていたのです。この辺り、われわれにはわかりづらい文章表現の呼吸といふべきものがあつて、テキストは左門の富田到着後、

先づ赤穴丹治が宅にいき、姓名をもて言ひ入るるに、丹治迎へ請じて「翼ある物の告ぐるにあらで、いかでしらせ給ふべき謂はれなし」と、しきりに問尋む。左門いふ。「土たる者は富貴消息の事、ともに論

ずべからず。

云々と言つて先の発言に続きますが、実際には「姓名をもて言ひ入るるに、丹治迎へ請じて」の辺りに省略され、収められている発言がもつとあつて、だからこそ、丹治は「迎へ請じて」すぐに「貴殿が宗右衛門の死について知つているのは不審だ」という発言になるのです。この前に「姓名を示して言い入れた」際、丹治の家来との間に当然すでに何らかの会話があり、宗右衛門の死後の扱いについても聞いた上での話であつたと理解すべきでしょう。わかりにくいところですが、ここを端折つてしまう筆法は、おそらく今日の小説作法で言えばきわめて拙劣と評されてもしかたない語り口で、今日の語りの約束事に盲目的にしたがつてテキストを読んでいたのでは見逃されてしまふ、まつたくテキストを読み誤つてしまふと言えましよう。

そして、左門は赤穴丹治と話して「骨を藏める」以上に「信を全うする」そのやり方を発見したのです。——もちろん左門の論理で——ですが。

それが宗右衛門の命の代替等価物としての丹治の命になります。それが「報い」であり「信義の全う」です。また、丹治に抜き打ちに斬りつける際に左門は

吾、今信義を重んじて態々ここに来る。「わざわざここに来る」、こここのところ、三度めの左門出雲下り

の理由説明ですが。) 汝は又不義のために汚名をのこせ。

と言いますが、これも対等等価のものをさがす論理なのです。

わが信義に対して、なんじの不義、だとすれば、不義に対応した汚名に釣り合うものは信義の名であつた。尼子がこのよしを伝へ聞き、兄弟信義の篤きをあはれとしたのですから、テクストは確かに、左門の行為によつて生じた彼らの「信義の名」のことを伝えていきます。

「汝は又不義のために汚名をのこせ。」の向こう側には「われらは信義の名を残す」という、つり合う重りの一方がぶらさがつていたと見て好いと思われます。

こうして見ると、あの、松田修氏によつて二人の肉体関係が勘繰られることになつた勘所である再会の日を九月九日一日に指定させるまでの会話も、別れがたい、未練たらたらの情緒連綿なのではなく、この類の即応的対等の呼吸呼吸による運びであつたと見て、二人の関係は一貫するものと思われます。次の引用は、原文そのままの引用ではなく、通し番号を振り、脚本形式にしているのは松田氏です。

一 赤穴―(前略) 一 たび下向てやがて帰(り) 来り、
裁水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。

今のわかれを給へ。

二 左門―さあらば兄長いつの時に帰り給ふべき。

三 赤穴―月日は逝やすし。おそくとも此の秋は過ぎじ。

四 左門―秋はいつの日を定て待(つ) べきや。ねがふは約し給へ。

五 赤穴―重陽の佳節をもて帰(り) 来る日とすべし。

六 左門―兄長必(ず) 此日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待(ち) たてまつらん。

(前掲、松田修「菊花の約」の論―雨月物語の再評価(2)に拠る。)

そしてこの直後に、語り手は、このかけ合いについて「情を尽くし」たものと評定しております。

この会話は、ほとんど心意気の競い合い、言い合いのごとくで、二人はこのように何かと言えば互いに報い合う。

これらは、二人の基底的関係の露呈であつたのです。作者の想定するところにおいては。

松田氏がこの辺りから読み取つた、二人の肉体関係、恋愛関係は、そう読めばそう読めるといつたもので、そういうことは今日の方が、同人誌で、どのようなマンガ、アニメ、小説に関しても隙あらば行われていることに類しており、松田氏が論じた当時よりもその噴飯ものの珍妙さは理解されやすくなつてゐる。これは今日ではもはや、意外にもたまたま(松田氏とは何の関わりも持たないところ)で、言わばどこにでもあるありふれたテクストとの関わり方になつてしまつております。

「菊花の約」は、非常の人の非常の論理による非常の交わりを描いたものです。一般凡俗がこれについて来られようが、来られまいが、それはおそらく語り手の知ったことではない。

そういう意味で、徹頭徹尾好くも悪しくも「菊花の約」は奇談であり怪談です。世にも稀なる稀談です。しかし、だったらどうだと言うのでしょうか。

信義はかくも実現困難である。われわれは二人の信義の実現を喜ぶべきではないのか。これは感嘆に価するものだ。語り手の認識はそれ以上でも以下でもありません。

本日はテキストの解釈行為自体の分析を志しながら、結局はテキスト読解の方が主たる話題となってしまうたようです。しかし、今後もテキストの解釈行為学の模索のことを頭に置きながら、このように具体的サンプルに即して試行錯誤してみたいと思っております。

御静聴ありがとうございます。

〈補注〉

(補二) 近世文学会では論文でもはやそういったことがらを扱いませんので、これには近世文学会特有の、そういったこと

がらを取り扱わなくなった今にまでいたる流れというものがあり、今後またその流れが変わることもあり得ると思えます。

(補二) W・J・オング『声の文化と文字の文化』（藤原書店、平成三年。原著一九八二刊）などを意識している。

(補三) 平成二十四年九月十八日、国文学研究資料館インターネット・ホームページの国文学論文目録データベースを「菊花の約」で検索し、確認してみたところ、七十一件の論文タイトルを得た。

(補四) 田中厚一氏「菊花の約」——自立する（作者）——『雨月物語の表現』（和泉書院、平成十四年）第一章「典拠からの逸脱」第一節。初出は『異徒』八（札幌）異徒の会、昭和六十三年四月）と上掲書に記されているが、初出誌はW E B C A Tで4図書館の所蔵しか確認できず、国文学研究資料館の国文学研究目録データベースにも国立国会図書館の雑誌記事索引にも出て来ないとあつて（同人誌か）、私は平成十四年の上掲書で初めて本論を読んだ。とは言え、「軽薄の人」さがしの諸案が出そろうのは平成に入ってからなので、昭和六十三年の初出はそれより早く、その点、本文の記述にはいささか問題ありだが、「軽薄の人」さがしがすでに始まって復数案が出ていること自体にまちがいはなく、また、簡単に手直しするにはいささか事情が複雑すぎるので、今はやむなく手を付けない。

(補五) 日本の文学研究においては全くと言いたくなるほどに意識されておらず、ほとんどの場合、論者が、作品であれ、作

者であれ、テキストであれ、それらの意味主権者に寄りそう立場でしか、論じないため、意外なことに、従来の「菊花の約」研究論文においても、テキスト内部の語りと読者の価値観が相違することがあり得るという至極当たり前のことがはつきりと認識され言明されている場合は見当たらない。

テキストと読者の価値観が異なる場合に関するヨーロッパ美学に伝統的な議論に関しては西村清和『フィクションの美学』（勁草書房、平成五年）参照。

（補六）このような現代の一部人が行っているテキストとの関わり方については、『八犬伝』について内田廣保氏が「いまどきの八犬士」（『読本研究』第六輯上巻、広島文教女子大学研究出版委員会・溪水社、平成五年）で紹介したことがある。

その当時にそのような言葉がすでに存在していたかどうか、新語でなおかつ一部のグループ活動（同人活動）およびその周辺（それを取り上げる営利メディア）で流通するはやり言葉・通語の類であるので、今すぐに確かめるすべを持たないが、（おそらくもうすでに約十年以上にはなるかと思う見当にはなるが）、現在このようなテキストとの関わり方を指示する単語が生じ、かつかなりこの単語が露出する機会も増えるようになってきている。それは「萌え」という単語である。（こういうことがらについては若い人のほうがくわしく、若い人に確かめてみるべきところであるが、そこまでする時間の余裕もなく、また、本論からすればそれは枝葉末節にすぎない。）

〈付記〉（補三）に記した平成二十四年九月十八日の「国文学研

究資料館」サイト「国文学論文目録データベース」の検索によつて、「平成十八年三月三十一日発行」の文献、浅見洋二編、大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書「テキストの読解と伝承」という、世間で流布していない、きわめて参照しにくい媒体に、飯倉洋一氏が「菊花の約」の読解——（近世的な読み）の試み——なる、「菊花の約」研究史にとつてきわめて重要な意義をもつ論文を発表していることに気が付いた。

この論文は、後世の研究史整理家から見れば、「菊花の約」研究史の流れが変化（カワル）する箇所のひとつに見えるだろうことを予言しておく。

私が本稿に記した考察自体は、拙稿「菊花の約」と徂徠学派——「信」と「軽薄」——（『文学』隔月刊第一〇巻第一号、岩波書店、平成二十一年一月）を書いた際の平成二十年時の論文検索状況が考察の前提になっている。私はその時点ではまだ右の論文の存在を知らなかったのである。

このニアミスの事実についてのみ、ここに記すだけでは、何の意味もない。しかし、さすがに四〇〇字詰原稿用紙八〇枚を超えてしまうと、もはやこれ以上書くことが遠慮される。このニアミスをめぐることもについては別に記す場所を求めたいと思う。

（やまもと・ひでき 岡山大学教授）